



常に親しく幼児に接する人々

— 保育界の中心実力 —

倉 橋 惣 三

實際保育者、もつと端的には、直接保育者ともいおうか、自ら常に親しく幼児に接している人々こそ、保育界の中心実力である。すなわち幼稚園教諭、保育所保育、その人々にこそ、幼児達は、真実に保育せられ教育せられているのである。

保育を行政的によく進展させ、経営的に正しく運転させている園長、管理者、その他の官庁の事務職員力の大きいのは勿論である。又、その人々の企画力が、實際保育の上に影響するところ大きいのも勿論である。しかし、事務的にいくら有能な企画者があつても、画家を待たずしては美術界は存在し得ない。又、音楽家を待たずして音楽界は成立し得ない。劇芸術の場合においては個々の俳優の外に、優秀な演出者が必要とする。しかも、その場合と雖も、プロデューサーだけで、舞台も映画も実演せられない。これと同じくという訳でもないが、幼児の保育も自ら親しく保育する人々によつ

てのみ実行せられ、保育界の眞の実績も挙がり眞の水準も上がる。

素より幼稚園でも保育所でも、一人々々の保育者が保育しているだけでなく、施設総体が保育しているのであり、多種の影響力はよつて成遂せられてゆくものであるから、優れたシナリオライターと周到なプロデューサーの合力を敬重しなくてはならぬ。しかし、それらの重視を以て、一人々々の實際保育者の重視以上におくことは辯^まげられない。一人々々の實際保育者に実力のない保育界は、空な単位^{たん}位の総合の如きものであるともいえる。

行政者・事務者が、充分尊重せられるべきは、實際保育者の実力を充分發揮させる意味においてである。それが偏して、實際保育者よりも、行政者・事務者が保育界の優位者とせられることには、認識の混乱が無いといえない。しかも、

從來、そうした認識の誤りが世にないといえない。かくいうは、秩序の論理的必要と實際的円滑の理を掛けようというものでは勿論ないし、況んや、反動反撥の低級なる現代社会病を助長しようとするものでは、決してない。又、デモクラシーの理論をもち出して来て、この主張をするものでもない。たゞ、常に自ら親しく幼児に接する人々こそ、眞実の保育者であるという、論ずるまでもなく常識を新たにしているに他ならない。だから従つて、どこまでも常識のすなおさから脱逸してはならないと共に、常識に反することは決して正しいとし難い。若し實際保育者を、教育行政者の雇傭者視することがあつたら、此の常識に反する。保育者としてその業に従事しているものを、單なる勞役者として視ることがあつたら、此の常識をみだる。勤務は服務の規律によつて系統の上下がある。しかも、保育者は一人々々が、保育者としての自主に生きているものである。これは、保育者の人權というような一般論からいつていられるのではなくて、保育者たるものゝ個性の尊重においていわれることである。教育者は總てそうである。上からの命令を重んずること絶對である。軍隊においても、散兵の一人々々は、散兵線の規律を守ると共に、自らを以て闘うものであると昔から教えられていた。保育は勿論戦闘ではない。しかし、保育も亦、保育者の自主の愛を以てする活動であり、個性の活きた發露である。敢て、保育者の尊嚴とか保育者の權利などゝもいれないが、保育はわが事であ

る。わが事をわが事とする自尊と、わが事とさせられる自由なしに、その人の保育も活きず、その園の保育も充實せず、その園の保育も發達しない。同じことが、教育界において考へられなければならないが、保育界においても同一である。かくてこそ、保育者は、自ら勞することを自ら楽しみ、その業（保育）に常に自ら忠實である。だから、親もその保育に信頼し、国もその保育を依頼し、幼児も實際に親しく保育せられるのである。實際保育者は他から雇われて役目として保育しているものではない。

『すべての幼児』のため、（前号巻頭）ということとは、企業と行政に當るものゝすべてに、常に心としていて貰いたい祈りである。しかも、より功実な祈りは、『すべての實際保育者』が自主と個性の眞実の保育者であることである。若し、行政者・事務者がその我執や、便宜から、『すべての幼児』を忘れるようなことがある時でも、『すべての實際保育者が、すべての幼児のために』協力の心を失わず、連合の和を失わない時、『すべての幼児』のための祈りは実現せられるであろう。日々に親しく幼児に接している實際保育者こそ保育界のたのみである。そういう實際保育者こそ、一匹の迷える小羊をも見のがさないのみならず、よきかこいに導くことを忘れないであろう。しかも、その各のかこいはそれ／＼のよさを具備すると共に、その境は春草に／＼ながら、春風相通うている。